

音楽資料

「ゲーテの詩に最初に作曲した作曲家たちの歌曲はつつましくて、原詩に確実に順応していた。まもなくシューベルトが自分のローマン的な感傷性をゲーテの詩に混えた。シューマンは小さな令嬢じみた憧れごちをつけ加えた。そしてフーゴー・ヴォルフに至るまでのうちに、強調的な熱弁のいきおいが増してきて、節度のない分析の傾向の度が強まり、魂の最も隠れた隅々までをも照明しないでは置かない意向が募った。」

- ・ベートーヴェン (1770-1827) 魔王

もっともゲーテが自分の詩につけがベートーヴェンの歌曲を好んでいなかったのは事実ですが、彼は友人ツェルターの作曲したもの以外は誰の作曲も好みませんでした。

その中で、ベートーヴェンの『エグモント』だけは高く評価して、人にもほめ『フィデリオ』と共に自分の劇場でも上演しています。(ユニテ 33 青木やよい「生々発展する魂」より)

- ・シューベルト (1797-1828) 魔王
- ・シューマン (1810-1856) 詩人の恋

※フーゴー・ヴォルフ (1860-1903 オーストリア)

ドイツ・リート の頂点をなす作曲家と紹介される。ゲーテの 51 の詩集を歌曲に作曲する。

ヴァーグナー信仰。晩年は梅毒による精神病院への収容、自殺未遂の後、狂気のまま精神病施設で過ごし 43 歳直前で亡くなる。

「ヴァーグナー主義の伝統にとらわれている、故習厳守の批評界が認めないような芸術だった。それは新しい仕事だった。なぜなら、ベートーヴェンやヴェーバーやシューマンやビゼーがメロドラマを天才力をもって駆使したことは事実だとはいえ、しかし彼らが歩いた足跡をそのまま辿ることはクリストフには問題にならないことだった。」

- ・ビゼー (1838-1875) ハバネラ